

75 彌性園蔵 幕末期の診療録

田中 祐 尾

河内国若江郡八尾東郷村の彌性園蔵九代当主田中元資と十代寛治郎の診療録が今回整理された。当時和紙は貴重で裏を習字の手習いに使いそれをさらに襖や衝立の裏貼りにしたため散逸を免れた。カルテとしては安政七年から慶応四年のものが解読されていて漸次体裁が整い最も新しいものは罫紙に彌性園のネーム入りでこれらとは別に大福帳形式の出納簿がある。病名の記載はなく合剤の処方から推測できる。消化器・呼吸器・婦人科・皮膚科・小児科・泌尿器科の順に疾患が多く寄生虫・発熱・鬱病・湿疹・中耳炎・四肢関節痛・眼疾・衰弱・栄養失調・痔疾・動悸・浮腫なども少なくない。

男性患者が圧倒的に多く小児を入れると八割を占め使用人の受診が目を魅く。多分この地では農民や商人の経済力が高く身分差別もみられず自由闊達な風土が窺え

る。勿論誰もが医者に罹れたわけではなく調査対象の東郷村中心九ヶ村の人口四二九〇人中受診したのが二五八軒の五〇〇人弱であった。

コレラや流感の襲来期には当然死亡が多く受診者数に大差があるが平年の延べ受診者の平均は四百人弱である。

転帰は全快の記入が多く全快率七〇%、再出(発)と休業で五%、残りが中断と死亡である。薬代は一括払いが大部分で平均一病期につき現在の一万円強と高額である。当時超貴重品だった砂糖を使った菓子による菓子代という記載がたびたびあり薬代に添えて医師に贈る現在の慣習に生きている。収穫期には米札という記入がありこれは米屋への兌換券で、薬代に替えたと思われる。

彌性園文庫には当時漢方医学の書籍だけで四百二十部数百冊が在庫し、その処方内容の特徴として独自の工夫と画一を避ける手法が目立つ。サフラン・ペラドンナ・キナといったオランダ医学の薬名も見られる。これらの治療成績が彌性園のライフワークであった『彌性園方函』の完成へと繋がることとなる。

江戸期を通じて医師にカルテの記載義務はなく、各人が独自の記載を残していると推察されるけれども各地で余り系統的報告はない。彌性園の世襲医師が地域の医療への使命感からこのようなメモを積み重ねたとすれば少なくともこの地方でのユニークな医学遺産との評価が可能である。

以上の統計は大部分が森田康夫氏（樟蔭東女子短大）の労作による。

（大阪市立大学医学部）